

5) 湿地性希少鳥類

平成 25 年度の湿地性希少鳥類であるサンカノゴイ、ヒクイナ、オオセッカ、コジュリン、ヨシゴイ及びチュウヒの 6 種について、調査結果をまとめるとともに、過年度の結果との比較及び考察を行った。

①サンカノゴイ

全調査項目（鳥類衝突調査、踏査及び定点調査、ラインセンサス調査、ヨシ原造成事後調査）での平成 25 年度の各調査月の確認例数を表 3-5-1 に、確認位置を図 3-5-1 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

確認例数の合計値をみると、北部は 94 例、南部では 20 例と北部で多かった。

北部では、4 月から 7 月の繁殖期に確認例数が多く、8 月には 1 例と減少した。確認地点は、XXXXXXXXXXに集中していた。

南部では、4 月から 6 月に確認され、7 月以降は確認されていない。確認地点は、北部のように出現が集中する地域はみられず、XXXXXXXXXXで確認されることが多かった。

繁殖にかかわる内容として、北部、南部共に雄の鳴き声が確認された。また、北部では 5 月から 7 月にかけて堤外地のヨシ原と水田地帯周辺を往来する個体が確認された。特に 6 月から 7 月の飛翔は、ヒナへの給餌のために餌運びを行っていたと考えられ、7 月には、堤内地水田地帯にとまる幼鳥が確認された。南部では目視による確認例数が少ないが、繁殖期に確認されているため、繁殖の可能性が考えられる。

表 3-5-1 各調査月におけるサンカノゴイ確認例数（平成 25 年度）

調査月	鳴き声（Booming） の確認例数 ^{注1)}		目視の確認例数	
	北部	南部	北部	南部
4 月	17	7	8	
5 月	19	3	7	
6 月	26	9	6	1
7 月			10	
8 月			1	
合計	62	19	32	1

注 1) 北部：北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部：甚兵衛大橋から南側の地域（甚兵衛広沼）

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査：4 月、5 月、7 月（計 3 回）

踏査及び定点調査：4～8 月（計 5 回）

ラインセンサス調査・定点調査：4～6 月（計 3 回）

ヨシ原造成の事後調査：4～8 月（計 5 回）

過年度の調査結果との比較を表 3-5-2 に示す。

北部に関しては、平成 23～25 年度における雄の鳴き声等の確認数が 3 個体前後と、平成 16 年度から平成 22 年度の 6 個体前後に比べ少なくなっている。ただし、平成 16 年度から平成 22 年度の期間内でも 4 個体前後の確認時期もあり、確認が難しいためにばらつきが生じている可能性がある。また、東日本大震災に伴い生息地直近の堤防が崩落したため、補修工事が同時期に行われていた。この補修工事、鳴き声等の確認の減少要因となっている可能性がある。

なお、あくまでも繁殖行動に伴う鳴き声の確認の減少であり、繁殖行動を一時的に行っていないことも考えられ、個体数が減少したかは判断できない。

南部に関しては、北部同様ばらつきはあるものの、個体数に大きな変化はみられなかった。

表 3-5-2 過年度の調査結果との比較（雄の鳴き声等）

調査年度	雄の鳴き声等の確認状況		
	北部	南部（甚兵衛広沼）	計
平成 15 年度※1	3 個体前後	8 個体前後	11 個体前後
平成 16 年度※1	6 個体前後	4 個体前後	10 個体前後
平成 17 年度	6～7 個体程度	7 個体前後	13～14 個体前後
平成 18 年度	6 個体前後	6 個体前後	12 個体前後
平成 19 年度	4 個体前後	5 個体前後	9 個体前後
平成 20 年度	4 個体前後	1 個体前後	5 個体前後
平成 21 年度	6 個体前後	3 個体前後	9 個体前後
平成 22 年度	6 個体前後	8 個体前後	14 個体前後
平成 23 年度	3 個体前後	5 個体前後	8 個体前後
平成 24 年度	3 個体前後	6 個体前後	9 個体前後
平成 25 年度※2	3 個体前後	6 個体前後	9 個体前後

※1 平成 15 年度、16 年度の地域数は、各月（4、5、6 月）のうち、計数の最も大きな月の数値を示した。

※2 平成 25 年 8 月までの結果を示した。

図 3-5-1 サンカノゴイの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

②ヒクイナ

全調査項目（鳥類衝突調査、踏査及び定点調査、ラインセンサス調査、ヨシ原造成事後調査）での平成 25 年度の各調査月の確認例数を表 3-5-3 に、確認位置を図 3-5-2 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 81 例、南部では 123 例と南部で多かった。目視による確認は少なく、確認例の多くは鳴き声による確認であった。

北部では、XXXXXXXXXXで多くみられた。繁殖期を通して生息が確認されていることや 8 月には幼鳥が確認されていることから、周辺で繁殖しているものと考えられる。

南部では、広範囲に生息し、堤外地ヨシ原での確認が多いが、堤内地の水路等でも確認されている。繁殖期を通して生息が確認されたことから、繁殖の可能性がある。

本種は夏鳥として調査地に渡来し、渡来当初である 4 月は活発に鳴く時期であるため、4 月の確認例数が多い。

表 3-5-3 各調査月におけるヒクイナ確認例数（平成 25 年度）

区域 ^{注1)}	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	合計
北部	29	26	5	14	7	81
南部	55	52	11	1	4	123

注 1) 北部：北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部：甚兵衛大橋から南側の地域（甚兵衛広沼）

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査：4 月、5 月、7 月（計 3 回）

踏査及び定点調査：4～8 月（計 5 回）

ラインセンサス調査・定点調査：4～6 月（計 3 回）

ヨシ原造成の事後調査：4～8 月（計 5 回）

過年度の調査結果との比較を表 3-5-4 に示す。

印旛沼周辺のヒクイナの個体数が増加傾向にあることが伺える。

表 3-5-4 過年度の調査結果との比較

調査年度	確認状況		
	北部	南部（甚兵衛広沼）	計
平成 18 年度	—	—	7 個体
平成 19 年度	1 個体	5 個体	6 個体
平成 20 年度	3 個体	17 個体	20 個体
平成 21 年度	22 個体	39 個体	61 個体
平成 22 年度	21 個体	64 個体	85 個体
平成 23 年度	19 個体	15 個体	34 個体
平成 24 年度	48 個体	73 個体	121 個体
平成 25 年度※	81 個体	123 個体	204 個体

注) 平成 15 年度、16 年度、17 年度は個体数を確認することを目的とした調査ではなかったため記載していない。平成 18 年度は北部、南部別での個体数把握を行っていない。

※平成 25 年 8 月までの結果を示した。

図 3-5-2 ヒクイナの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

③オオセッカ

全調査項目（鳥類衝突調査、踏査及び定点調査、ラインセンサス調査、ヨシ原造成事後調査）での平成 25 年度の各調査月の確認例数を表 3-5-5 に、確認位置を図 3-5-3 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 24 例、南部では 41 例と南部で多かった。

確認例数は、北部、南部共に 4 月に多く、北印旛沼の堤外地で広範囲で確認された。4 月は渡りの時期であるため、渡り移動中の個体が多数含まれている可能性が高い。一方、6 月以降、オオセッカは確認されておらず、北印旛沼周辺では繁殖しなかったものと考えられる。

表 3-5-5 各調査月におけるオオセッカ確認例数（平成 25 年度）

区域 ^{注1)}	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	合計
北部	21	3				24
南部	39	2				41

注 1) 北部：北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部：甚兵衛大橋から南側の地域（甚兵衛広沼）

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査：4 月、5 月、7 月（計 3 回）

踏査及び定点調査：4～8 月（計 5 回）

ラインセンサス調査・定点調査：4～6 月（計 3 回）

ヨシ原造成の事後調査：4～8 月（計 5 回）

過年度の調査結果との比較を表 3-5-6 に示す。

印旛沼周辺のオオセッカの個体数が増加傾向にあることが伺える。

表 3-5-6 過年度の調査結果との比較

調査年度	確認状況		
	北部	南部（甚兵衛広沼）	計
平成 18 年度	—	—	11 個体
平成 19 年度	7 個体	12 個体	19 個体
平成 20 年度	16 個体	2 個体	18 個体
平成 21 年度	75 個体	7 個体	92 個体
平成 22 年度	138 個体	59 個体	197 個体
平成 23 年度	51 個体	27 個体	78 個体
平成 24 年度	68 個体	75 個体	143 個体
平成 25 年度※	24 個体	41 個体	65 個体

注) 平成 15 年度、16 年度、17 年度は個体数を確認することを目的とした調査ではなかったため記載していない。平成 18 年度は北部、南部別での個体数把握を行っていない。

※平成 25 年 8 月までの結果を示した。

図 3-5-3 オオセツカの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

④コジュリン

全調査項目（鳥類衝突調査、踏査及び定点調査、ラインセンサス調査、ヨシ原造成事後調査）での平成 25 年度の各調査月の確認例数を表 3-5-7 に、確認位置を図 3-5-4 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 172 例、南部では 5 例と北部での確認がほとんどであった。

北部では、[REDACTED]、並びに[REDACTED]
[REDACTED]に集中してみられた。

南部では、堤外地ヨシ原や堤内地低茎草地でみられた。

繁殖にかかわる内容として、さえずりが 4 月から 8 月まで毎月確認されたほか、4 月には縄張り争い、8 月には幼鳥が確認され、繁殖が確認された。

大竹地区では、平成 21、22、23、24、25 年度に造成地を利用する個体を確認された。ヨシ原が本種の生息環境に適していることがうかがえる。なお、北須賀地区造成区域内では確認されていないが、近傍の堤内地水田の低茎草地で 1 例確認されている。

表 3-5-7 各調査月におけるコジュリン確認例数（平成 25 年度）

区域 ^{注1)}	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	合計
北部	39	52	32	20	29	172
南部	3	2				5

注 1) 北部：北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部：甚兵衛大橋から南側の地域（甚兵衛広沼）

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査：4 月、5 月、7 月（計 3 回）

踏査及び定点調査：4～8 月（計 5 回）

ラインセンサス調査・定点調査：4～6 月（計 3 回）

ヨシ原造成の事後調査：4～8 月（計 5 回）

過年度の調査結果との比較を表 3-5-8 に示す。

印旛沼北部で安定してコジュリンが確認されているが、南部での確認は少ない傾向にある。

表 3-5-8 過年度の調査結果との比較

調査年度	確認状況		
	北部	南部（甚兵衛広沼）	計
平成 18 年度	—	—	29 個体
平成 19 年度	40 個体	4 個体	44 個体
平成 20 年度	42 個体	4 個体	46 個体
平成 21 年度	214 個体	11 個体	225 個体
平成 22 年度	146 個体	26 個体	172 個体
平成 23 年度	123 個体	1 個体	124 個体
平成 24 年度	180 個体	4 個体	184 個体
平成 25 年度※	172 個体	5 個体	177 個体

注) 平成 15 年度、16 年度、17 年度は個体数を確認することを目的とした調査ではなかったため記載していない。平成 18 年度は北部、南部別での個体数把握を行っていない。

※平成 25 年 8 月までの結果を示した。

図 3-5-4 コジュリンの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

⑤ヨシゴイ

全調査項目（鳥類衝突調査、踏査及び定点調査、ラインセンサス調査、ヨシ原造成事後調査）での平成 25 年度の各調査月の確認例数を表 3-5-9 に、確認位置を図 3-5-5 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 254 例、南部では 30 例と北部で多かった。

本種は 5 月頃、夏鳥として調査地に渡来し、9 月頃まで北印旛沼全域に生息する。

繁殖にかかわる内容としては、北部、南部共に雄による鳴き声や 8 月に幼鳥が確認されたほか、堤外地と水田地帯を往来する個体や、沼の兩岸を往来する個体が確認されており、ヒナへの給餌のために餌運びを行っていたと考えられ、北印旛沼周辺が本種の繁殖場所となっている。

北須賀地区では、平成 21、22、23、24、25 年度に造成区域を利用する個体が確認された。大竹地区では、平成 22、23、24、25 年度に造成区域を利用する個体が確認された。ヨシ原が本種の生息環境に適していることがうかがえる。

表 3-5-9 各調査月におけるヨシゴイ確認例数（平成 25 年度）

区域 ^{注1)}	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	合計
北部	2		131	85	36	254
南部		1	9	7	13	30

注 1) 北部：北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部：甚兵衛大橋から南側の地域（甚兵衛広沼）

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査：4 月、5 月、7 月（計 3 回）

踏査及び定点調査：4～8 月（計 5 回）

ラインセンサス調査・定点調査：4～6 月（計 3 回）

ヨシ原造成の事後調査：4～8 月（計 5 回）

過年度の調査結果との比較を表 3-5-10 に示す。

印旛沼周辺でのヨシゴイの個体数について、年度毎の変動があるものの多くの生息が確認されている。

表 3-5-10 過年度の調査結果との比較

調査年度	確認状況		
	北部	南部（甚兵衛広沼）	計
平成 18 年度	—	—	204 個体
平成 19 年度	92 個体	22 個体	114 個体
平成 20 年度	101 個体	36 個体	137 個体
平成 21 年度	387 個体	138 個体	525 個体
平成 22 年度	417 個体	180 個体	597 個体
平成 23 年度	241 個体	27 個体	268 個体
平成 24 年度	316 個体	43 個体	359 個体
平成 25 年度※	254 個体	30 個体	284 個体

注) 平成 15 年度、16 年度、17 年度は個体数を確認することを目的とした調査ではなかったため記載していない。平成 18 年度は北部、南部別での個体数把握を行っていない。

※平成 25 年 8 月までの結果を示した。

図 3-5-5 ヨシゴイの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています

⑥チュウヒ

全調査項目（鳥類衝突調査、踏査及び定点調査、ラインセンサス調査、ヨシ原造成事後調査）での平成 25 年度の各調査月の確認例数を表 3-5-11 に、確認位置を図 3-5-6 に示す。なお、調査項目によって調査を実施した月は異なる。

各区域における確認例数の合計値をみると、北部は 13 例、南部では 17 例と南部で多かった。

本種は主に冬鳥として調査地に渡来するが 8 月まで連続して確認され、少数の個体は越夏していると考えられる。

北印旛沼の広い範囲を利用していたが、ヨシ原が広範囲に及ぶ[]で採餌飛翔が多くみられた。

北須賀地区では、造成区域上空で採餌飛翔する個体を確認された。

表 3-5-11 各調査月におけるチュウヒ確認例数（平成 25 年度）

区域 ^{注1)}	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	合計
北部	8	1	2	1	1	13
南部	14	1	1		1	17

注 1) 北部：北印旛沼の甚兵衛大橋から北側の地域、南部：甚兵衛大橋から南側の地域（甚兵衛広沼）

注 2) 各調査項目で実施した調査月は以下のとおりである。

列車走行に伴う鳥類衝突調査：4 月、5 月、7 月（計 3 回）

踏査及び定点調査：4～8 月（計 5 回）

ラインセンサス調査・定点調査：4～6 月（計 3 回）

ヨシ原造成の事後調査：4～8 月（計 5 回）

過年度の調査結果との比較を表 3-5-12 に示す。

印旛沼周辺のチュウヒの確認状況は、年度変化が大きい、渡り鳥であるため安定していないことが原因と考える。なお、毎年、[]ねぐら利用が確認されており、主要な生息地になっているといえる。

表 3-5-12 過年度の調査結果との比較

調査年度	確認状況		
	北部	南部（甚兵衛広沼）	計
平成 18 年度	—	—	428 個体
平成 19 年度	21 個体	28 個体	49 個体
平成 20 年度	19 個体	58 個体	77 個体
平成 21 年度	31 個体	56 個体	87 個体
平成 22 年度	44 個体	83 個体	127 個体
平成 23 年度	6 個体	7 個体	13 個体
平成 24 年度	48 個体	197 個体	245 個体
平成 25 年度※	13 個体	17 個体	30 個体

注) 平成 15 年度、16 年度、17 年度は個体数を確認することを目的とした調査ではなかったため記載していない。平成 18 年度は北部、南部別での個体数把握を行っていない。

※平成 25 年 8 月までの結果を示した。

図 3-5-6 チュウヒの確認位置（全調査項目）

貴重種保護の観点から確認位置・記録等については公表しないこととしています